

【ねがいましては】

令和5年11月6日

KYOWA SCHOOL

第401号

「モンスターを倒した」

読売新聞(2023.10.19)寸評にあった記事からです。

クイズです。

1. モンスターとは、いったい誰のことか?

2. 「モンスターを倒した」と、SNSに書き込んだ人は誰なのか?

こたえです。

1. 母親になります。

2. 娘になります。

これは、2018年3月、滋賀県守山市で当時58歳の母親の遺体の一部が発見された事件で、娘が母親を殺害した際、SNSに書き残した言葉になります。

私はこの記事に触れた時、今までにない大きな衝撃を感じました。もっと深く知りたい・・・。

母親の遺体は両手、両足、頭部が切断されており体幹部のみでした。加害者である娘、あかり(仮名)は、他の部分は燃えるゴミに出したと供述しています。

ではなぜこのような残虐極まりない事件が起こってしまったのか。

母親である妙子(仮名)さんは一人娘を医者にするため、きびしい監視下のもとで娘を勉強させました。進学先は家から通える国公立大しか許さず、そのため浪人生活は9年に及びました。隠れてスマホを所持したことで土下座させられたり、中学2年生当時、あかりさんが定期テストの点数を改ざんすることで母親は激怒、正座する娘の膝めがけ熱湯を浴びせ、「医者に連れていくから、お医者さんにはうっかり飲み物をこぼしたと説明しなさい」と、冷ややかな声。

それでもあかりさんは耐え続けます。父親はどうしていたのか気になるところですが、そのような母親の娘に対する言動に自らの健康維持(生命維持)を選択し別居します。それでも父親は、別居後も自らは給料から3万円のみを自己の生活費とし、のこりはすべて母親あてに送金していたそうです。父親はどのような生活を送っていたのか・・・。

あかりさんは浪人生活中、何度も家出を試みました。しかしすべて母親に発見されます。探偵事務所を使用しています。母と子の2人だけの生活中、誰もそれを止める者はいませんでした。密室の中のできごとです。娘にとっては何が良くて何が悪いことなのか、判断することもできません。「これは、どこの家庭でもおこっているごく普通のことなんだ」そう思うしかなかったのかもしれません。

大学受験を目指していたころ、予備校のテストで偏差値が目標に達していないときには、目標偏差値からその時の偏差値を引いたぶんだけ母から鉄パイプで尻を殴られたそうです。「さっさと着替えて勉強しなさい」「ありがとうございました。ごめんなさい」

逮捕当時のあかりさん(31歳)は裁判の際、「心が疲れ、母親から解放されたかった」と述べています。

小学校当時から続いた母親からの虐待を約20年も耐えたあかりさん・・・犯行は決して許されるものではありませんが、その間の暗く長い歳月を思うと・・・。

新聞では次のように結んでいます。

—◆近年、行き過ぎた教育熱は虐待だとみなされる。「勉強しなさい」「なぜこんな成績なの」。ついつい言葉がきつくなる経験は多くの親にあるはずだ。それが1日30回しかも連日となれば、子どもを追い詰める『あなたのため』というエゴイズムになる(石井光太著『教育虐待』)◆「褒めて伸ばす時代」と言うが、褒めてばかりいられないのが現実だ。我が子をどう見守るか。間もなく受験の季節が訪れる。—

この事件を詳細に取り上げた書籍があります。『母という呪縛 娘という牢獄』齊藤 彩(講談社)・・・筆者は獄中にいるあかりさんと何度も手紙をかわします。また、実際に面会にも出かけます。そして書き上げた書籍です。

最後に第一審の判決文を読み上げた大西裁判長が、あかりさんの苦しみに対して理解を示す言葉を投げかけています。「お母さんに敷かれたレールを歩みつづけていましたが、これからは自分の人生を歩んでください」

自分の人生・・・私はこの一言に深く感動を覚えます。

子どもたちは一人ひとりが皆、すべて「ひと」なのです。自分に意思があり、自分だけのたった一つの人生があります。目の前にひかれたレールを上手に歩くことが「ほめられる」ことだとは言いきれません。もし、本人が「これっておかしい」と感じたのなら、堂々と目の前にいる人に知らせるべきです。

目の前にいる人です。それはこれをお読みいただいている方、ご本人です。「子のこころ」を善し悪し関係なくすべて受け止めてくれる方が子には必要です。それが「ひと」としての在り方です。

学校では様々な「キズ」を負って子は帰宅します。その傷を癒すことのできるのは唯一ただ一人います。

これを読みいただいているご本人しかおりません。この80億人のなかでたったひとりです。子の味方です。